

第8回「京都御苑ずきの御近所さん」

作庭家

重森 千青 様



■重森様は、昭和を代表する作庭家・三玲様のお孫様にあたられますが、祖父、お父様同様に作庭家になられたきっかけを教えてくださいませんか。

僕は重森家の次男に生まれました。重森の家は、祖父である三玲さんの時はもちろん、もっとそれ以前から長男が家督相続で全部を継いできていました。やはり三玲さんも長男だったので、岡山の家を継ぎました。ただ庭園がやりたかったのが最終的には京都へ出てくるんですけどね。そういった流れがあったので詩人になりたかった僕の父も、最終的には家業となった庭園業を継ぐことになりましたので、僕も親父も、家業は長男である兄貴が継ぐものだと思っていたんですよ。ところが僕の兄貴がちょうど大学4年の頃、「俺は庭はやらないよ」って宣言して、本当にサラリーマンになってしまったんです。親父からしてみれば、しまいには帰ってくるだろうという思いもあったみたいなんですけど、うちの兄貴は頑固な人だったので、親父もいろいろと画策するんですけど全然駄目でした。

それまでの僕はというと、家業を継ぐなんて思ってもいなかったんで、ものすごく自由に気楽に育っていました。それこそ、大学を卒業したら会社勤めで、定期的なサラリーをいただければ十分なんじゃないかという考えがあったんですよ。

それと同時に、たくさん趣味があって、特にバイクに熱中しました。初めは、周囲の友達の多くが免許を持っていて、バイクがあればいろんなところに思いっきり旅行に行けるという気持ちから、16歳、高校生の時にオートバイの免許をとったんです。最初に旅行に行ったのが夏休みを使っての北海道一周。その後も、日本全国あっちこっち行きましたよ。それで不思議なものなのですが、行く度にとりあえず有名な庭園だけは見に行くんですよ。まだ作庭家になろうなんてのは、全然なかった頃のことですし、せいぜい行ってきましたとそのくらいで、当時の写真を見てみても2、3枚撮っているだけなんですけどね。

そうしているうちに大学生の頃に、バイクを通して知り合った方に筑波サーキットでワンメイクレースに出ないかと誘われたんですよ。サーキットなんてもちろん走ったことはなかったんですが、元々バイクで走るのが好きだったこともあって、いざ出場してみるとハマってしまいました。そこからずっと筑波サーキット通いの日々になりました。でもやっぱりお金がかかるんですよ。タイヤもすぐに減ってしまいますし、エンジン整備はプロに頼んだら高いので自分たちでやろうと、少しずつばらしては「ああ、こうなってるんや、ああなってるんや」と段々整備って面白いなと思うようになりました。いじればいじる程に早く走った時は快感ですし、全然走れなかった時は何が駄目だったんだって友達といろいろな意見を交えながら対策を練りました。あと、やはり四季ですよ。春夏秋冬、気温や天候、時間によっても路面の状況が全部変わってきます。今から思うとこれって庭園と共通点

があるんですよね。そのうちに真剣にレーシングメカニックを仕事にしようかと悩むようになりました。ただ、当時は大学を卒業して間もない頃でしたので、出たら出たで、自分の食い扶持は何とかしないと駄目ですから、バイトをしながらサーキットに行くという生活をしていました。でも、やっぱりそんなにいいバイトってなかなかなく、ある時ずっとやっていたバイトが切れたんです。それでも何とかして新しいバイトを探さなきゃなと思っている時に、親父から「お前ちょっと何もしていることないんやったら、バイトせえへんか」と言われました。そういうところは親父はちゃんと見ていますよね。何をするかと聞いたら「ポール持っているだけでかまへんし、誰でもできる。場所は京都なんやけど」と言われて、測量の手伝いだったんですよね。

最初に連れて行かれたのが、藪内のお家元の露地でした。藪内のお家元の露地で、ポールを持って実測をやらされたんですよ。別に勉強をしている訳でもなかったのですが、お茶の露地ってこんなふうになってるんやなと勉強になりました。次に連れて行かれたのが、三十三間堂の東隣の養源院でした。そこにある縁先水鉢を実測するからって言われてね。その後は修学院離宮の中茶屋や孤篷庵、桂離宮と、あちこち連れて行ってもらっていました。残念ながら、裏千家と表千家はもう終わっていたんで行けなかったんですけど、武者小路千家は行きました。何も知らないのに武者小路千家の庭園なんて、普通入れないですよ。僕もあの時の実測からいまだに一回も入ってないですからね。

手伝いが終わる頃には、少し庭って面白いと思うようになっていました。次に手伝ったのは、会報誌の編集でした。祖父の代につくった、京都林泉協会という会があり、その庭園の勉強会の会報誌です。その時の経験が自分で文章を書く練習になり、のちのち本を書く練習になったと思っています。

しかも、林泉協会は毎月例会があり、例会担当者が毎月見学に行く庭園をいくつかピックアップして下見しに行くんです。いろんなお寺さんに行きました。すると当然庭があるわけです。それで林泉協会は古建築や石像品の研究者も呼んでいたんですよ。お手伝いしているだけで、庭はしょっちゅう見に行きますし、古建築や障壁画、石像品もあるでしょ。それまで知らなかったいろんな知識がぶわーとインプットされて、少しずつ感心を持ち出したら、その担当者から原稿が送られてきます。もちろん原稿を割り振りしていくにあたって読む訳ですから、さらに興味をかき立てられました。そうやって段々、親父に上手いこと上手いこと庭の世界に引きずり込まれていったんです。

そしたら、畳み掛けるように親父から東京の重森の家の植木の手入れをしなきゃならないと言われました。重森の家に昔いた人で埼玉県の川越で独立した人がおられたんですよ。「時間空いているようだったら手伝ってやってな」と言われていて、切った枝などを片づけていたら、「君、今何もやってないんやったら、うちにバイトにきいひんか？」って言われました。造園業は結構バイト代もいいですから、そんなんやったらいいなと造園工のバイトに行き始めることになりました。

実際に造園工のバイトに行き出したら本当に面白かったんですよ。それまでの編集の仕事も面白かったですが、どちらかというと体を動かす方が好きなんでね。それで庭を仕事としてやろうと決意して本腰を入れて6年くらい川越市で働きました。そのあと親父のもとで鞆持ちをしながら、勉強しよう、吸収しようと思ったら1年もたたないうちに親父が亡くなってしまいました。ポーンと放り投げられた感じで、もう僕がやって行く仕事はこれしかないとなった訳です。

■大学では何を勉強されていたんですか？

文学部で英文科の勉強をしていました。国文科を出て、詩人になりたかった親父と同じ文学部です。ただ、国文科に行けば絶対比較されるし、親父に「お前今どんな勉強してるんや。こんな簡単なもんやないか」と絶対に言われるのが決まっているというのと、英語をもっと勉強できたらいいかな

という理由で英文学科に進みました。ですから造園のその字も知らなかったですよ。大学を出てから自分でやろうとなった時にえらい大変でした。

元々、親父に大学は全然関係ない分野に行けと言われていたんです。もし万が一造園をやることになったとしても、造園学科に行ったりしたら頭が凝り固まってしまうから止めておけと言われていたんですよ。実際、親父も祖父の三玲さんも全然違う分野を勉強していましたからね。

■重森様は、東京生まれで、大学も東京、川越で働いていらっしゃいましたね。最近京都に居を構えられた理由を教えてください。

これはやっぱり仕事ですね。三玲さんが亡くなってから、親父は東京を拠点にしながら京都もやらなきゃならないと東京と京都をだいたい半分ずつぐらい生活していました。それをそのまま引き継いだんですけど普通の会社と違って、うちの場合、僕の先代、先々代といえば独立独歩の人たちですから何も資産なんか残してくれていませんでした。残っているもので資産といえるのは、本と図面くらいです。

僕が京都に来たところで知り合いのところに行って、ちょっと情報収集をすとか精々そのくらいで仕事になる訳でもなかったの、最初のうちは1箇月の内1週間も京都にいなかったです。東京を拠点に活動し始めたんですけど、周囲の人に京都でこういう庭がある、あんな庭があるという話はよく耳にしていました。やっぱり日本庭園は京都を中心に大きくなっていったという歴史がありましたから、有名な庭を見るにしても庭園の仕事にしても京都にいる時間が長くなってくるんですよ。そうやって徐々に京都で生活する比率が上がってきて、親父と同じように東京と京都での生活が半分くらいになったのが10年～15年くらい前のことでした。こちらの業者さんなどとお付き合いしていると、どこそでこういう石造品が見つかったから見に行かへんかと、そういう新しい情報を教えてください。そういうことは東京にいた時には全然なかったんですよ。やっぱり京都ってすごいところやなと思ひ始めたら、段々こっちの仕事が増えてきたというのもあるんですけど、今では完全に逆転していて1箇月のうち京都3週間で東京1週間くらいの生活になっています。段々歳がいつてきたっていうのもあるんですけど、京都で生活している方が東京よりも楽なんですよ。東京はともかく広すぎますし、京都は何をするんでも近いですよ。車で1時間も走らせれば山の真っ只中、自然に囲まれたところに行けるでしょ。「老後は絶対京都だな」と思って京都に家を建てるまでになりました。もちろん東京の方の家も置いてはあります。僕が仕事で1週間くらいは向こうにいますし、拠点として置いてはあります。でも京都の方が圧倒的に楽ですね。ほっとします。

庭の仕事をして拠点を京都に重点的に置くようになってから10年過ぎましたが、春夏秋冬の季節の違いだけではなく時間の違い、見え方の違いや天候なんかも入ってきますし、あとその生きてる中での1年1年の中で自分の心情なんかもちょこちょこ変わってきます。例えば去年の秋に見た庭園を同じ季節に見に行ったとしても、同じ目、同じ感情で見られるかということと全然違う。庭って奥が深いなと感じるようになってきた時、造園の仕事をしてるんやったら、京都にいますと言えるようにならないとまずいだろと思ったのもありますね。

■重森様は、これまで数十の作庭を行われたと伺っています。そのうち、一般公開されているものの中でお気に入りの庭を教えてください。

一般公開の寺では、僕が40歳頃に最初につくった和歌山県の長保寺の庭です。長保寺は紀州の徳川の菩提寺で、その御住職から連絡を頂いて、庭を含め山内のいろんな整備をしたいのでアドバイスして欲しいと言われました。御住職も面白い方だったので、ちょくちょく仕事ですが遊びに行くうちに、歴代の紀州のお殿さんたちの御霊が入っている御霊屋というちょっと大きい建物の玄関前の庭をつくってくれと依頼されました。

庭をつくるにあたってできるだけ山内にある材料でつくろうと決めました。というのは紀州といえば青石ですし、しかもそのお寺のある山全体が青石の岩盤帯だったんです。山内にはものすごくよい岩盤があちこちに露出している上に、使っていない石だったらどれを使ってもかまわないと言われたんです。庭の主石にかまえた石は、山の麓に並んでいた側室のお墓のところに山から落ちてきた石があって、それがちょうどいい高さで太さだったんです。その石を見た瞬間、あれいい石やと思ひ、使用していいかを尋ねると「あれはどかさなあかんと思っていたから助かるわ」と言って頂けたんですよ。

実は以前から1回は紀州の青石だけで庭をつくってみたいという気持ちもあったんですけど、紀州の青石は早い段階で採れなくなっていたので、もう作庭は不可能に近いと思っていましたから、その夢が叶ったんです。そういう縁でできた庭だったんで思い入れのある庭園ですね。

京都なら今から5年程前に真如堂の中につくった「随縁の庭」です。真如堂の塔頭の吉祥院の御住職に本堂の書院の荒れた状態になっているところに庭をつくって欲しいと言われました。要望なんかありますかと聞いたら「実はここのお堂は三井家の歴代の位牌が全部入っているお堂なんです」と言われました。真如堂は三井家の菩提寺なんです。できれば三井家とわかる庭にしてくださいと頼まれました。難しいこと言われたなと思ったんですが、お堂の前のところにある透かし彫りの墓段に4つの正方形を斜めに傾けたものが彫ってあり、それが三井家の家紋だと言われて「これや!」と思ひましたね。日本庭園では4という数字は忌み嫌われている数字なんですけど、三井家の家紋に因んで4つ目ですし中の砂とか使う色も4色にして全部「4」にひっかけたデザインにしました。

そこでも山内に余っている材料、使われていない材料を使わせて頂けることになりました。僕としてはできれば京都でつくる庭だったので地の石を使ってつくりたいという思いがありました。京都やったらチャート、山石やという希望があって、実際真如堂さんにはいい山石がいっぱいあったんです。

仕切りの石には葛石を使ったんですけど、山内で使われていてちょうど取り外されたものがあったので、統一された綺麗な姿で使うことができました。また主石もお堂の左側で落ち葉に埋もれていた石でした。落ち葉の中から頭だけぽんっと出ていてその姿が格好よかったですよ。それを使っていいか尋ねると「ああ、これは埋もれている石だから、こんな表舞台に引っ張ってきてくれるんやったらこの石も喜ぶし助かります」って言って頂いて、この庭も完成することができました。

お寺さんには、驚くほどいい素材が転がっています。長保寺も真如堂も、山内にある材料を再利用してつくることできたってことが嬉しかったですね。

考えてみたら僕の祖父が、東福寺で庭をつくる際に当時の執事長から今使っている材料は全部再利用するよにと唯一の設計条件を出されていました。だから「八相の庭」ができあがったんですよ。逆にいうとその条件が出されていなかったら今ある形は絶対出てこなかったと思います。重森の家からできた庭園をつくる前のいくつかのスケッチ案には市松模様なんて一つも描かれてなかったですよ。

やっぱり再利用するっていうのは、最初に自分で思い描いていたものとは違う完成になるかもしれませんが、今回の真如堂でも長保寺の庭でも、自然の石を使って組み立てていくとどんな石でも

見立てられるんです。絶対に自分が求めているものがあるはずだっていう思いが全部通じたっていうのはすごく嬉しかったので、特にこの2つの庭は思い入れが強いですね。

■重森様の今後の作庭に向けた意気込みをお聞かせ願いますか。

やはり京都に居を移したとはいえ、京都の深いところまではまだまだわかってないですね。いろんな業種の人と交流をしていると若い方でも伝統の重みがあるなって思いますし、その中で「次なる一步はなんだろう」と模索している感じなんですよね。そういうしっかりとした伝統的なことが基礎になってくると思います。いくつになっても「もう十分や」というのはないと思いますね。歳が行けば行く程に、もしかしたら「まだ足りひんまだ足りひん」と思うかもしれないし、そういう気持ちの中で僕の祖父なんかも、新しいもの新しいものって追求していってましたから。そういう次なる時代に向けて新しい庭をつくっていきたいという思いはありますね。

■重森様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか。

先の実測の話なんですけど、実は仙洞御所にも実測で来ました。天皇さんが隠居されて住まわれるところの庭園だっただけは聞かされていたんで、ああすごい庭だなと漠然と思ったのを覚えています。それが御苑との最初の関わりですね。

それから仕事を始めて京都に来ることが増えてきた頃にもう一度、仙洞御所の庭園を見に来ました。その時、面白い空間だなと感じたんですよ。昔、この塀に囲われているこんな小さな中に天皇さんが住まわれていたという事実がすごく不思議であり面白く感じました。そしてそんな場所が天皇さんが江戸に出て行かれたあとも、公園的な形、自由に散策できる場所として今もあるっていうのはすごくいいなって思います。すぐぱっと来られる場所に、こんなにたくさん自然が残っているというのはいいなって思いますね。

■京都御苑で好きな場所（庭園含め）、好きな時期などはありますか。

好きな場所は庭園のあるところ全部です。時期は、全部好きです。御苑の中は結構古木になっているものが多いんですが、こんな都市部の真っ只中ですぐ間近に古木に触れることはそうそうないですよ。御苑は巨樹に触りたいと思ったらすぐに触れるでしょ。都会では普通なかなかできないですから、そういうことができる場所があるというのは貴重やと思います。

それから樹木が多いので、四季それぞれの楽しみがありますね。春は新芽でしょ、夏は緑陰の爽やかさを感じられますし、今年は特にいいですけど秋は紅葉がすばらしいですし、冬になったらいまままで落葉樹の葉に覆われていたのが全部落ちますからものすごく明るくなります。そういうふう四季を通していい場所だなって思うんですよ。特に冬場は年間通して一番、化粧っけがないというか、いわゆるスピン状態な訳です。その状態で見ても綺麗だと感じるのは御苑がいい場所だからで、だからこそ、時期に限られることなくいつでもいいと思えますね。これだけの自然が満喫できる空間が都市部の中にあって、しかも開放しているというのは本当にすごいと思います。ですから京都御苑の好きなところは全体ですね。

■京都御苑の今後について御意見などございましたら自由にお聞かせください。

今言ったように、御苑には樹木がすごく多いです。今の状態は樹木帯の中に人が入っていけるようにはなっているでしょ。これだけ樹木がある中に人が普通に入っている状態というのは、それだけすごい管理をされているってことなんです。これは絶対続けていって欲しいですね。

あとは、僕も自転車で来ることもあるのであんまり言えないんですけど、自転車と歩行者はある程度区切らないとまずいかなというのはありますね。自転車で走行している人が、歩行者と同じ感覚になっている人が多いでしょ。中には気が大きくなっているのか、自然と自転車の道ができていて、そこを人がいようが頑に突っ込んでくる人がいるんですよ。あれは本当に勘弁してほしいですね。

あと要望としては今、閑院宮邸跡や九條邸跡の遺構が一般公開されているのと同じように、近衛邸跡庭園も中まで入っていけるようになれば嬉しいなと思いますね。あと剪定具合も、もう少し手を入れて頂きたいですね。この前久しぶりに近衛邸跡庭園の近くまで行ったんですけど、夏木が生い茂って、池が見えにくかったです。他にも九條邸跡庭園は今、滝を見るのに橋からしか見ることができないので、沿道からもう少し滝の方に近づけるようになったら嬉しいなって思いますね。

■海外からお客様が増えていますが、その人たちへの対策など何かしたらよいとお考えでしょうか。

この間、スイスから御家族で来られている方に話をしに東福寺に行ったんですよ。その娘さんが説明を書いている立て看板をカメラに写したら、パッと翻訳で出てきたんですよ。ということは日本語であれそういうものが立っていれば、ここはこういう施設なんやっていうのが簡単にわかるようになってきています。そういう看板は御苑の中は意外と充実してきているように思いますね。あと、中華圏の人ってあまり積極的には御苑の中に入ってきていないように思います。少しは見かけますが、やっぱり周知されてないのかなと思いますね。そのへんは、もう少し京都御苑っていうのはいいとこなんだって、いろんな形で周知していく活動をしていかなければならないと思います。

その一環として僕はいろんな文化センターの受講生たちや京都工芸繊維大学の学生たちを連れて九條邸と閑院宮邸の遺構を見学にきています。意外と学生も知らないんですよ。授業が終わった後に学生たちが「タダでこんなええ庭園見えたんやな」と言っているんですよ。日本建築士を目指している子たちは、拾翠亭とかにちょこちょこ来ているみたいですけど、現代建築の設計科の学生は意外と足運んでないんですよ。だから僕は九條邸跡などにある常緑落葉、針葉樹、四季折々変化していく樹木を見るのはもちろん、巨樹になってくるとどういうふうに根が張ってどういうふうに幅や根っこを広げていくか、現代建築を設計する人間としては知らないとまずいよと学生に話をしています。いききっかけになった授業ではなかったかなと思っています。これだけ気軽に入れるところをもっといろんな方々に見てもらいたいなという気持ちです。

京都御苑のよさの一つとして、この佇まいがあると思います。植物園ではないですから園芸品種の植物とかを植えるというのも御苑の佇まいから外れるように思います。もしやるなら、ひっそりと四季の花をちょこちょこんと植えるのがいいかもしれませんね。ひっそりと、これが日本的な情緒じゃないかと思います。

元々あったものは地味かもしれないですが、徐々に華やいでいるっていうのが一番だと思います。例えば、桜も山の中にぽつんぽつんと点在している桜の木が春になってふわっと咲くから綺麗なんです。並木を人工的につくって、ふわっと大量に咲いているのは勘弁ですね。はっきり言って下品ですよ。京都も植生は昔とはずいぶん変わってきましたが、今の植生の中でぽつんとぽつんと山桜が咲くと、ああ綺麗ななって思いますし、そういう話を講座ですると会社をリタイアされた人たちが、それを実践して次の講座に来られた時に「どこそこの山に行って、点在して咲いている桜の美しさを

初めて知りました。それ以来、列植しているソメイヨシノは見たくないです」と言ってくれるんです。本当の昔の日本人の美の感覚だと思います。

2016年11月24日 インタビュー
聞き手：田村省二，山本昌世

○重森 千青様プロフィール

1958年，東京都生まれ。中央大学文学部卒業。重森庭園設計研究室代表。作庭家，庭園研究家，京都工芸繊維大学非常勤講師。日本庭園についての著述，講演，講師活動並びに日本全国にて庭園の設計に携わる。昭和を代表する作庭家・庭園研究家重森三玲の孫にあたる。庭園作品は『松尾大社瑞翔殿庭園（京都府）』『長保寺・寂光の庭（和歌山県）』『久幸会今村病院（秋田県）』『真如堂・随縁の庭（京都府）』など多数。著作に『日本の10大庭園』（祥伝社新書），『京の庭』（ウェッジ），『ランドスケープの新しい波』（メイプルプレス）などがある。